

ロマンティックにささやいて

目次

ドラマティックに抱きしめて	187
恋をするなら	101
ロマンティックにはなやいて	5

ロマンティックにささやいて

夕焼けに染まるグラウンド。
一人でサッカーボールを蹴りながら走る少年。
バックネットの裏でそれをずっと見ている少女。
その手に握り締めているのは真っ白なタオル。
でもきつと、今日も渡せない。
まるでお祈りをするかのようにギュッと手を握り締め、切なすぎる眼差しで少年の姿を追っている。

たった一人でボールを追いかけるその姿に、少女の胸がぎゅつと痛くなった。
バックネットから離れ、少しだけ近付いたその時、ふいにボールが少女の足元まで転がってきた。
追ってきた少年はそこで初めて少女に気がつく。
険しかった顔に少しだけ笑みが浮かぶ。

『……なんだ、いたのか』
『……うん』

少年はさらに近づくと、微かに震えている少女の手からタオルをそっと取った。

『使っいいい？』
『あつ、うんっ』

自分のタオルで汗を拭く少年の手を、少女は信じられない思いでじっと見つめていた。

汗と砂埃すなぼこりで汚れたタオルを持ったまま、今度は少年が少女を見つめる。

不安げに揺れる少女の眼差しとは対照的に、少年の瞳は熱く燃えている。

少年の腕がすつと上がって、長い指が少女の頬に触れた。

指の冷たさに、少女が小さく震えた。

その様子に少年が艶あでやかに微笑んだ。

『……あのさ、おれ、お前が……』

ジリリリリ……!!

「……ああもうっ、イトコだったのにつ」

たった今まで目の前にあったロマンティックな光景は一瞬で消えた。手探りで目覚まし時計を止める。ガンツという音とともにピタリと止まった不快な音。

淡い桃色のカーテン越しに朝の日差しを感じながら、大きくため息をついた。

左手には開いたままの文庫本。眠る直前まで読んでいた、少し古ぼけたその本はピンク色の背表紙で可愛い挿絵がついている。学生の頃からお気に入りせりふの少女小説だ。台詞なんてもう空そらで言える

くらい繰り返し読んだ。でも、何度読んでも夢に見るくらい素敵なお話。

腕を伸ばして、ベッドのすぐ横にある背の低い本棚にそれをしまった。そこにはもちろんわたしのお気に入りコレクションが入っている。ずらりと並ぶピンクの背表紙に思わずニヤリと笑みがこぼれた。

容姿端麗な男の子と、何の変哲もない“普通”の女の子のお伽話みたいな恋愛物語。昔から妹がコレを見るたびに、「お姉ちゃんのイメージに全然似合わないっ」とぶつくさ言っていたことを思い出す。でも妹が隠れてこの本を読んでいたことをわたしは知っていた。

乙女チックが好きで何が悪い。

王子様みたいなゴージャスな男の子に憧れて何が悪いの。

二十九歳の独身女が読む内容ではないのはわかっているけれど、今のところやめるつもりはない。だって、誰に迷惑をかけているわけでもないもの。

ぐっと背伸びをしてから、えいっと起き上がる。本棚の上に置いてある読書用の小さなライトはつけっ放しだった。それを消してから、小さなテーブルの上にあるリモコンに手を伸ばしてテレビをつけた。

一人暮らしを始めた時からずっと暮らしている八畳のワンルーム。お給料が上がるたびに引越しを考えるけれど、手を伸ばせば必要なものが取れるというのは結構快適だ。贅沢を言うならユニットバスのトイレとお風呂が分かれていればもつといいけれど、もうそれにもすっかり慣れてしまった。小さなキッチンのたった一つの電気コンロはお湯を沸かす以外ほとんど使っていない。料理は

それなりにできるけれど、あえてする必要もない。コンビニと美味しいレストランを知っていれば、食べることはない。

一人暮らしも五年以上経つと朝の支度もお決まりのパターンができていて、意識しなくてもからだが勝手に動く。目覚めてから三十分後にはいつものわたしが出来上がっていた。

飾り気のないグレー系のスーツ。くせも味気もないまつすぐな黒い髪はきつちりと一つに束ねて黒いバレッタで留める。横長のフレームの眼鏡をかければ、ほら、お局様の出来上がりだ。周囲の評判はあまりよくないけれど、自分では結構気に入っている。この「ざあまず眼鏡」だって、わざと選んだんだから。

とことんお堅いオールドミス。それはわたしそのものだ。

三浦倫子、二十九歳。独身。

見かけは典型的なお局様。不細工だと言われたことはないけれど、顔立ちは地味だと思う。

理想のタイプは昔の少女小説に出てくるような、ハンサムでゴージャスで王子様みたいな男の子。もちろんそんな人は現実にはなかなか存在しないことも知っている。

社会人になって間もなくできた初めての恋人は会社の先輩で、当然のことながら“普通”の人だった。告白されたことに舞い上がって付き合い始めたのはいいけれど、生来地味で頭の固いわたしに嫌気がさした彼は、半年も経たないうちにわたしに別れの言葉を告げ、さらには会社からも去っていった。

随分経ってから上司の恋人にちよっかいを出して地方へ飛ばされたとかなんとか噂も流れたけれど、本当のところはわからない。

シヨックを受けて一日寝込んだ後、ただ一つ確実にわかったことは、自分が男性との付き合いに向いていないということだった。

彼と別れて以来誰ともお付き合いができないのは、自分が努力をしていないからだ。何にも努力をしなければ誰も寄ってくることはなく、もちろん自分から行く勇氣もない。

友達曰く、おしゃれに気を使つて愛想よくすればいいんだとのことだけれど、それができないのがわたしだ。受身なのが駄目なこともわかっている。傷つくことを恐れて臆病になっていることも自覚している。

でも、それでも恋がしたいと思う時もある。

いつか王子様が……なんてもう言うつもりもないけれど、こんなわたしでもいいよって人がどこかにいればいいのに……

あの本に出てくる男の子みたいに……

『おれだけだよ、君のことを守れる男はね。わかってる？ 子猫ちゃん』
なんてっ。

きゃーっ、もうなんて素敵なのっ。

とても高校生とは思えないこの台詞っ。

……って、落ち着けわたし。高校生に口説かれると思う方がヤバイでしょ。

こうやって妄想が出てしまうなんて、本当にもう末期かもしれない。

もうっ、悩んでたって仕方がない。妄想は本の中だけで満足しておこう。

はっとテレビの時刻を見ると、もう出かけなければいけない時間になっていた。急いでベッドの横の本棚から今日の一冊を選び、ブックカバーをかけて鞆にしまった。もちろんこれは電車の中や会社の休憩時間を読むつもりだ。

テレビの主電源を切ってから部屋をざっと見回して最後にもう一度鏡を見る。キツチリとまとめられた、色気もそっけもないわたし。これが現実なのだ。

2

いつもどおり始業時刻の三十分前に会社に着く電車に乗った。朝の満員電車はそれほど嫌いじゃない。段々と近づいてくる副都心のビル群。大きな駅で吐き出されるように降りる乗客。無関心を装い、無個性のままでいられる空間。

いつもと変わらないその風景は、安定と不安の両方をもたらす。きっと何も変わらない一日が今日も始まる。

入社後、いつものようにロッカールームで制服に着替えてから、自分の所属する経理部のフロア

に向かう。

「おはようございます。三浦主任」

入り口のすぐそばにいた、先月入ったばかりの新人社員が初々しい笑顔で迎えてくれた。

「おはよう」

初々しさなんて当の昔にどこかに行ってしまったわたしは、いつもどおり貼り付けたような笑顔を浮かべて挨拶をしながら自分の席へと向かった。昨日綺麗に片付けてから帰った机の上には、すでにいくつかの書類が載っている。椅子に座って鞆をしまい、はあと息をつきながらそれを眺めた。主任。出世がしなかったわけじゃないけれど、いつの間にかポストが上がっていった。

同期で入った何人かですでに寿退社じゆたいしゃをしていることは言うまでもない。このままどんどん役職だけが上がって一人取り残されるのかと思うとぞつとずする時もある。

まあ実際、確実にそのコースを歩んでいることは否定できない。安定と不安。時々ふと訪れる、背筋がぞつと震える感覚。傍らかたわに寄り添える人が欲しいと心から思う瞬間。

あーあ、恋がしたい。

その時ドサツと音がした。ふと目を向けると、真っ赤なブランドのバッグが隣の机に置かれたところだった。

「おはよう、倫子」

「おはよう」

「ねえ、明日飲み会があるんだけど、久しぶりに来ない？ ちなみ合コンじゃないわよ」

「……朝からいきなり話す話題じゃないわよ」

やんわりと睨むように見上げると、同期の田端寛美たまたひろみが赤く塗られた唇の端に小さな笑みを浮かべた。

「予約を取るから早めに人数確認しておかないとね」

「……わたしはいいわよ」

「たまには来なさいよ。浅倉あさくらさんは来ないけど、営業部とかからもイトコ来るわよ」
イトココって、肉とか魚の切り身みたい……

寛美のそんな言い方がおかしかかったので思わず心の中で笑ってしまった。

「ごめん。せっかくだけどわたしはいいわ。それよりも、週末はほぼ毎週飲み会に行ってるじゃない。あなたこそ気をつけなさいよ」

もう若くないんだから。その言葉を視線に乗せて、めつと睨む。

「大丈夫よ。自分でちゃんとセーブできてるんだから」

寛美はまたふつと笑って席を立つと、別の後輩のところに行って同じ話をし出した。

同期の田端寛美は垢抜あかぬけた美人で、同じ歳の二十九歳だ。派手めの彼女と地味なわたしだけけど、性格が正反対のせいか初対面の時から結構仲よくしている。

寛美がちよつと前まで夢中になっていた浅倉さんは同じ会社の情報管理部の課長さんだ。彼に恋人ができたことが明らかになって、しばらくは彼女も自暴自棄じぼうじき気味だったけれど、最近になってようやく落ち着いてきた。それでも彼の姿を追わずにはいられないらしい。本人は目の保養だと言っ

て彼との接点を探し続けている。

コンパや飲み会に頻繁に参加して、新しい恋を見つけようとしている彼女を羨ましく思うこともあるけれど、自分も同じようにしようとは思わなかった。基本的に社交的なことが苦手なのだ。

それに、お酒が飲めない。お酒の席で気の利いた会話もできない。だから新人歓迎会や送別会、忘年会以外はほとんど出たことがない。それでも毎回声をかけてくれる寛美には感謝をしている。

ちなみに浅倉課長は近寄りたいくらいの美形だ。確かに、ゴージャスな王子様タイプではあるけど、冷たい感じが否めないのもわたしはあんまり興味がない。見る分にはかなり目の保養になるけれど。

でもどうせ見るなら子犬みたいな男の子の方がいい。

そう、あの夕焼けのグラウンドで、一人でボールを蹴っているような……

カモシカみたいに細くて、でもたくましい脚。風に揺れるのは少し長めの髪。

運動部だけど、絶対っ汗くさくさくなくて……そうっ、柑橘系の香りよ。レモンとかライムとか……

それから、心地よく耳に響くバリトンの声。

……ん？ バリトン？ どんな声だろう。イマイチ想像ができないけど、まあいいわ。

スマートで格好よくて、いつも優雅に微笑んで……

たくましい腕と長い指。乱暴にかき上げられた長めの前髪から覗く、熱く燃える瞳。

女の子を抱く腕は力強く、でも優しく。情熱の嵐みたいに強引で……

……って、おいおい大丈夫か、わたしっ。

子犬からは程遠いし、ああもう、色々キャラが混じってるわっ。それに高校生に欲情してどうすんのっ。

変態さんよっ、変態さんっ。落ち着け、倫子っ。

「百面相ですか？ 三浦主任」

「……えっ、うああ……っ」

いきなり話しかけられたのもものすごく変な声が出てしまった。大慌てで顔を向けると、目の前に楽しそうな顔をした営業部の藤崎彬が立っていた。

「ふ、藤崎くん……な、なあに？」

取り繕ったような表情を急いで貼り付ける。何事もなかったような顔ができていればいいけれど、イマイチ自信がない。

でも藤崎くんはお日様みたいな笑顔を向けただけで、それ以上は何も突っ込まなかった。ギリギリセーフだったのかしら？

「すみません。ええと。交通費の請求したいんですけど、領収書がないので……」

「ああ、じゃあこれ書いて出してください」

わたしは慌てないように気をつけながら、引き出しを開けて書類を一枚取り出した。

「どうもありがとうございます」

藤崎くんはまた晴れやかな笑顔をわたしに向けて、颯爽と出ていった。

あー、もうっ。変な顔してたのかしら？ わたしっ。二十九歳の独身の堅物女に、さらに変態の称号がつくなんて……それだけは絶対に避けたいわ。妄想は家の中だけにしないと。

なんて、一人で苦悶くもんしていると寛美が席に戻ってきた。

「今、藤崎くん来てたわね。相変わらずイイオトコだけど、年下なのが残念だわ」

本当に残念に思っているのかはわからないけれど、寛美が年下に興味がないのは本当だ。

藤崎くんは二十五歳。わたしよりも四つも年下で、しかも妹と同年だ。営業部の若きホープ。見た目は今時のハンサムな男の子で、女の子たちの人気を集めている。今のところ彼女はいいという噂。

染めてない真っ黒な髪は少し長め。明るくて人懐っこくて、優しそうな笑顔はどことなく子犬を連想させる。なんとなく小説の中に出てくる王子様みたいな男の子に似ているような気がして、実はちょっとだけ気になっていた。

女性すべてに優しいから、わたしに対しても分け隔へだてなく声をかけてくれる。寛美の浅倉課長じやないけれど、目の保養にたまに見るくらいならいいよね別に、なんて自分に言い聞かせて、時々こっそりと見ていることはもちろん誰にも秘密。

同じことだ。昔の少女小説に想いをはせることも、見目麗みめうるわしい男の子を盗み見ることも。どっちも同じ。堅苦しい二十九歳の三浦倫子の裏側に隠された、ほんのささやかな楽しみ。

そう、それだけ。

昼休み。社内食堂の一番後ろの隅っこの席でランチを食べ終わった後、カフェオレを飲みながら持ってきた本を読むのが日課になっている。

寛美と食べることもあるけれど、一人の方が気分が楽だ。後ろは壁だし隣にも誰もいないから、わたしが何を読んでいるかなんてわからない。このほんの少しのティータイムがわたしの息抜きだった。

大きな笑い声が聞こえてきた。視線だけを向けると、前の方のテーブルで営業部の人たちが楽しそうに食事をしていた。一番大きな声で話しているのは、営業部のお祭り男、高坂たかさかくんだ。その隣には藤崎くんが座っている。

こちら側を向いている藤崎くんの顔が一瞬わたしを見たような気がしたのは、きつと気のせいに違いない。きつと。

「そういえば、営業部の藤崎さんってさあ」

急に聞こえてきた名前に一瞬だけ心臓が大きく鳴った。ちらりと顔を上げると、すぐ前のテーブルに女の子が三人座ったところだった。それぞれの手に飲み物を持っている。

「総務の有田ありたさんから猛アタックされてるらしいわよ。ほら、今でしょ」

女の子たちは前方の席の彼らを見ていた。

「……あら、ホントだ」

「有田さんって可愛いわよねえ」

「彼女って、どうすれば自分が一番可愛く見せられるのか知ってるのよね」

「そして男はそれに騙される」

「所詮男って可愛い女に弱いものなのよ。藤崎さんも時間の問題じゃない？」

「あーあ。これでまたイイオトコが一人なくなったわ」

「ねえ、それよりさ……」

彼女らの声はいつの間にか聞こえなくなっていた。胸の奥がちくちくとするのは何故だろう。

わたしは本を読むフリをしながら、もう一度前方を見た。藤崎くんの隣に座っている、可愛らしい女の子が目にと留まった。楽しそうに笑いながら、一生懸命話しかけている。はにかむような笑顔と今風にふわりと広がった茶色い柔らかそうな髪。わたしのお気に入りの恋愛小説の主人公みたいに可愛い子。きつと彼よりも年下だろう。

そっか、うん。確かに可愛い。

藤崎くんの隣にはああいう子がよく似合う。

なんだ。なーんだ……

結局その日、わたしは一ページもお気に入りの本を読むことなく、昼休みの終わりを告げるチャイムを聞いた。

3

彼が走っている。

グラウンドに響く歓声と叫び声。

わたしは試合を見守るその他大勢の女の子の中にいて、走る彼を見ていた。

彼は時々ちらりとこつちを見る。

勘違いした他の女の子が黄色い声を上げるけれど、彼が見ているのはもっと後ろだ。

隠れるようにして見ている一人の女の子。

彼の蹴ったボールがゴールネットに吸い込まれる。

同時に鳴る試合終了の笛の音。

一際大きく響く歓声の中、彼は彼女だけに笑顔を向けた。

試合を終えた彼が走ってくる。

取り囲もうとするわたしたちの間を器用にすり抜けて、彼は一直線に彼女のもとへと行き、その華奢なからだを持ち上げて力いっぱい抱きしめた。

悲鳴と歓声が響く中、わたしは口づけを交わす二人を見つめた。

彼の顔がいつの間にか藤崎くんの顔に変わった。

それから彼女の顔はあの有田さんになった。
わたしは遠くからその二人を見上げて、そっと涙をこぼした。

ジリリリリ……!!

目覚まし時計の音と共にバツと目が覚めた瞬間、心の中で悪態をついた。
まったくもうっ、自分の夢くらい自分中心にできないもんなの？

主人公になったっていいじゃない。夢の中くらいカッコイイ男の子に抱きしめられたっていいじゃない。

なのに、なのに、なのにっ。なんでその他大勢の女の子なの!?

しかも名前すらついてない、主人公のライバルにもなれない端役はやくも端役。いてもいなくてもわからないような存在。

それにしても、夢の中にまで二人で出てくるなんて……。

わかりきっていた現実を目の当たりにしたくらいで夢を見るほど動揺してどうするの。年下の見目麗みめうるほしい男の子に可愛い彼女ができるのは当然のこと。今更ショックを受けることなど一つもない。これまでだって何度かあったことだ。

夢の中でも現実でも、わたしはただ見ているだけのその他大勢の一人でしかないのだから。

いつもどおり支度をして、重いからだを引きずったまま家を出た。満員電車の窓から見えるお気

に入りの風景も今朝はそれほど興味を覚えない。それでもいつもの時間に会社に入り、いつもと同じようにキツチリと着替えて自分の職場へと向かった。

「おはよう、倫子」

珍しくわたしよりも早く来ていた寛美が声をかけてきた。

「おはよう」

椅子を引いて鞆をしまう。机の上に重ねられた書類をちらりと見て、思わずまたため息が漏れた。

「ねえ」

「ん？」

顔を上げて横を向く。今日の寛美はいつも以上にお化粧に気合が入っているようだ。髪はゆるく巻かれ、アイラインはいつもより濃かった。

「今日の飲み会やっぱり来ない？」

「うーん、ごめん。いいわ」

「飛び入り参加でも大丈夫だから、気が向いたら来なさいよね。たまにはハメを外すことも必要よ」
寛美は呆れる風もなくそう言うのと、定時に帰るためにさっさと仕事を始めた。

寛美はわたしの過去を知っている数少ない人間の一人だ。

わたしが彼女曰く、「修行僧」みたいな生活をしているのも、未だに誰とも付き合わないのも前の彼のせいだと思っている。まあそれもあながち間違いではないのだけれど……

でも、それでもやっぱり今の現状はわたし自身の問題だ。わたしにもう少し勇気があれば、主人

公のライバルくらいにはなれるんだろうか……

嫌な夢を見ても、頭が痛くても、仕事はやらなければならぬ。さつき見た時よりも、うず高く積まれている書類を一つ一つ確認しながら、何もかも頭の隅に押しやって仕事に取りかかった。

人間やればできるものだ。黙々と仕事をしている間に時間は淡々と過ぎていった。そんな自分に悲しくも満足してしまう。

今日が金曜日だからか、定時になるとみんな次々と仕事を終えて帰る準備を始めた。

「じゃあ、気が向いたら来てよ」

そう告げてから、寛美もいそいそと帰り支度をしてロッカールームへと消えた。まったく予定のないわたしは、結局小一時間ほど残業をしてから、誰もいなくなったフロアの電気を消して職場を後にした。

着替えを終えて玄関ロビーに向かうと、さして広がるもないそこに数人が集まっていた。その中に藤崎くんを見つけて一瞬だけドキリとする。彼もこれから飲み会に行くのだろうか。

わたしはさっと下を向くと、「お疲れさまでした」と小さな声で言いながら集団の横をすり抜けて外へと出た。夜の空気に触れてホッと息を吐き、そのまま駅の方角へ歩き出す。

「三浦さんっ」

何歩も歩かないうちに突然呼び止められ、振り返るとそこに藤崎くんが立っていた。藤崎くんはいつもの人懐っこい笑顔を浮かべている。

相変わらずハンサムな子。

やっぱり夢の中で見るより実物の方が数段格好いい。たとえ可愛い彼女ができたとしても、見るだけなら別に問題ないわよね。

改めてそう思いながら、わたしよりも頭一つ分背の高い彼を見上げた。

「なあに？」

「あの、今から飲み会があるんですけど、よかったですか？」

その笑顔は反則よ、藤崎くん。

思わず、行くって言いそうになっちゃうじゃない。

「ごめんなさい。今日はちょっと」

そう言うと彼の笑顔がほんの少しだけくもったように見えた。

「…………デートですか？」

「まさかっ」

思いがけない質問に間髪入れずに答えると、また藤崎くんがゆっくりと笑った。それに呼応してわたしの心臓が大きく動く。

だって素敵な笑顔なんだもん。ドキドキしてしまうのはわたしのせいじゃない。

「飲み会は苦手ですか？ ほとんど参加されませんか？」

「え、ええ。お酒はあんまり飲めないから…………」

とりあえずそれは事実だ。藤崎くんは何かを考えているのか、わたしの顔をしばらくじっと見て

からポツリと言った。

「……お酒がなければいいんですか？」

「えっ？」

「……」

思わず聞き返したわたしに藤崎くんが口を開きかけたその時、可愛らしい声が割って入った。

「藤崎さん、そろそろ行きましょうっ」

ふわりとした巻き毛が揺れている。微かに香る甘ったるい香水の匂い。有田さんは藤崎くんの袖をそっと引つ張ると、にっこりと笑いながら彼を見上げた。

可愛いなあ……。女のわたしから見てもそう思うのだから、きつと彼も同じように思っているのだろう。たとえそれが計算された仕草であったとしても、それは彼女の努力なのだからわたしがどうこう言える問題ではない。

自分にはできない、それだけのこと。

藤崎くんはさりげなく腕を引いて彼女の手を外すと、少し困ったような顔をわたしに向けた。

「あの……じゃあ……またの機会に。お疲れさまでした。気をつけて」

「三浦主任、お疲れさまでしたあ」

「……お疲れさま」

有田さんはわたしにびよこんとお辞儀をすると、藤崎くんと連れ立ってさっきの集団の中に戻っていった。繁華街へと繰り出す集団を背にわたしはまた駅へと向かった。

満員電車で揺られながら、さつき藤崎くんは何を言いたかったのだろうと考えた。

優しい人だから、きつと気を使ってくれたのだと思う。社内で会うたびに、気さくに声をかけてくれる人は彼だけだ。でもそれが特別だとは思わない。だって、藤崎くんはそういう人だから。気遣いのできる優しい人。

そう、わたしだけが特別じゃない。それでも、思った以上に気にしている自分に戸惑ってしまう。どうやっても繁華街へと消えていく二人の姿を頭の中から追い出すことができなかった。

家に帰りついた時、時計は二十時を少し過ぎたところだった。部屋着に着替えてから、コンビニで買ってきたお弁当を電子レンジに入れて温める。

今日はお湯を沸かすのすら面倒くさかった。いつもなら温かなコーヒーでも入れるところだけれど、今日はペットボトルのお茶で済ますことにした。部屋の真ん中にある小さなテーブルの上にはコンビニ弁当とペットボトル。それからデザートに買ってきたプリン。

……わびしい。週末をこんな風に過ごす人間っていったいどれくらいいるんだろう。みんな今頃楽しく飲んでいるのだろうか。こんな思いをするくらいなら、我慢してでも行くべきだったのだろうか。

お弁当を食べ終えてテレビをぼんやりと見ていると、ふいに電話が鳴った。本棚の上に置かれた電話の画面を覗き込むと、実家の番号が表示されていた。受話器を上げた途端、ヤケに明るい母親の声が聞こえた。

立ち読みサンプル
はここまで

「……もしもし？」

『倫子ったら相変わらずなのねえ。金曜日のこんな時間に家にいるなんて』
からかいと呆れた様子が半分半分な声に思わずムツとなる。

「……ほっといてよ。遊びまわって居場所もわからないよりマシでしょ」

『それもそうだけども。たまにはハメを外してもいいのよ』

もうっ、寛美と同じこと言ってる。

『ちよつとくらい気になってる相手はいないの？』

「……いい、いないわよ」

一瞬、藤崎くんの顔がよぎったけれど、すぐにそれを頭から追い出した。

『じゃあさ、お見合いしてみない？』

「……えっ？」

『前から色々話はあったのよ。そういうのを娘に強要するのはどうかと思ってたから今まで言わなかったけど……。倫子はお父さんに似たのか、奥手だしねえ』

「……」

『お隣の奥さんの知り合いの方の親戚の息子さんなんだけど。結構いい感じの人らしいの。あなたよりも年上だし。会ってみるだけでもどう？ 別に恋愛結婚だけが人生じゃないんだし。あなたにはこの方が向いてるかもよ？』

そう言った母親の声がやけに優しく聞こえたのは何故だろう。

いつもならためらいもなく断りの言葉が口にできるのに、今一言も出てこないのは何故？
今夜は何故か無性に寂しかった。わたしだって幸せになりたい。

寄り添える誰かと出会いたい。たとえ作られた出会いだとしても、それでも幸せになれるかもしれない。ほんのちよつと、心が荒んでいたのかもしれない。だから気がつくつと、

「……そうね、会ってみようかな」

そう返事をしていた。

4

最低の週末だった。せつかく気分転換に掃除でもしようと思っていたのに、土曜日は朝から生憎あいにくの雨。ちよつと離れたところにあるスーパーに行くのは諦め、近くのコンビニで食料を買い込んだ。ベッドの上にごろんと転がって、雨の音を聞きながらぼんやりとテレビを眺める。

すでに後悔している。一時の感傷に流されてお見合いを受けたこと。

承諾した時の嬉しそうな母親の声を思い出すと少し心苦しいけれど、本当にこれでいいのかと一晩真剣に悩んでしまった。

時々藤崎くんの顔が頭の中をよぎった。彼のことを考えても仕方がないのに、心のどこかで何かを期待している自分もいる。